

令和 6 年度

龍谷大学付属

平安高等学校入学試験問題

国語

解答上の注意

1. この問題用紙は、「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。特に、解答用紙の受験科目欄にマークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0点となります。
3. 「はじめ」の合図のあと、受験番号を書き、マークしてください。
4. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。たとえば、**10** と表示のある問いに対して、③を解答する場合は、次の(例)のように解答番号 10 の解答欄の 3 にマークしてください。(例)

解答 番号	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
10	<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	<u>7</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>0</u>
11	<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	<u>7</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>0</u>

5. 解答用紙は機械で読み取りますので、折り曲げたり汚したりしないでください。特に、訂正する場合には、消しゴムで丁寧に消してください。
6. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
7. 問題内容についての質問は受けません。(問題は持ち帰ることができません。)
8. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
9. 「やめ」の合図があったら、解答用紙を表に向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。

(問題は持ち帰ることができません。)

受験番号

受験番号

問題は次のページから始まります。

国語

(解答番号

1

く

24

・

101

く

105

)

第1問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

贅沢ぜいたくとは何でしょうか。それは何らかの限界を超えた支出と考えることができます。ではどんな限界か。①ゴウセイな食事は贅沢と言えますね。仕立てのよい衣装も贅沢と言えるかもしれません。なぜでしょうか。そうした食事や衣装がなくても人間は生きてはいけるからです。つまり、それらは人間の生存にとっては必要ではないからです。するとこう考えることができるでしょう。我々は、人間の生存にとっての必要という限界を超えた支出が行われる時に、それに贅沢を感じる、と。

贅沢はしばしば嫌われ、退けられます。というのも、それはしばしば無駄だと捉えられるからです。確かに贅沢は生存の観点から見れば、無駄です。しかし、だったら生存に必要なものだけがあればいいのでしょうか。生存に必要なものだけがある生活とはどんな生活でしょうか。それは何らかのアクセシビリティがあれば②ヨウイに崩れ去ってしまうようなギリギリの生活でしょう。ギリギリの生活の中で人間は充実感を抱くことができますでしょうか。あるいは豊かさを感じるのでしょうか。昔から腹八分目と言いますし、人間の生存あるいは長生きにとってはその方が望ましいのかもしれない。けれども、やはり人間は時には美味しいものを腹いっぱい食べたい、十二分に食べたいと思うのではないのでしょうか。あるいはまた、自らの服装にこだわることで、自分らしさとか充実感を味わうことができるのではないのでしょうか。

実際、どんな社会も豊かさを求めたし、贅沢が許された時にはそれを享受してきた、と※ボードリヤールは言っています。あらゆる

時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主の浪費、一九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例が挙げられるでしょう(『物の体系——記号の消費』宇波彰訳、法政大学出版局、一九八〇年)。贅沢を享受することを「浪費」と呼ぶならば、人間はまさしく浪費を通じて、豊かさを感じ、充実感を得てきたのです。

A 人類はずっと浪費を楽しんできた。ところが、二〇世紀になって人類は突然全く新しいことを始めた、とボードリヤールは言っています。それが「消費」です。つまりここで消費は浪費と区別されて用いられています。浪費は生存のための必要を超えた支出の享受を意味しました。それは言い換えれば、限界を超えて物を受け取ることです。限界を超えて物を受け取るわけですから、浪費は満足をもたらしません。そして満足すれば浪費は止まります。たとえば、十二分に食事をして満足したら、お腹なかがいっぱいになって食事は終わる。つまり浪費には終わりがある。

I、消費には終わりがありません。なぜか。浪費の対象が物であるのに対し、消費の対象は物ではないからです。消費は観念や記号を対象とするのだとボードリヤールは指摘します。たとえばグルメブームのようなものを考えてみると分かりやすいでしょう。あるお店が流行しているからという理由で人はそこに赴く。そして一定の時間が経つと、今度は別のお店が流行しているからという理由で別の店に赴く。どうして人がこのような行動を繰り返すのかと言え、それは「その店に行ったことあるよ」と人に言うためです。最近ならば、画像をネット上に投稿するためでしょう。この消費行動はいつまでも終わりません。なぜならば、そこで人が受け取っているのは物そのものではなくて、「あのお店に行った」という観念だからです。記号とか情報と言ってもいい。

消費において人は物そのものを受け取らない。食事を味わって食べて満足することよりも、その食事を提供する店に行ったことがあ

るといふ観念や記号や情報が重要なのです。そして観念や記号や情報はいくら受け取っても満足を、つまり充満をもたらさない。お腹がいっぱいになることはない。だから止まらない。そのような性質を名指して、ボードリヤールは消費を観念論的な行為とも呼んでいます。

B 消費のメカニズムを応用すれば、経済は人間を終わらなき消費のサイクルへと向かわせることができます。二〇世紀にはこれが大々的に展開され、大量生産・大量消費・大量投資の経済が作り上げられるとともに、人類史上、前例のない経済成長がもたらされました。同時にそれは甚大な環境破壊も引き起こしました。

(中略)

消費社会は僕らに何の贅沢も提供していない。「次はこれだ、その次はこれだ」と僕らを消費者になるように駆り立てている消費社会は、僕らを焦らせているだけで、すこしも贅沢など提供していない。つまり消費社会の中で僕らは浪費できていない。僕らは浪費家になって贅沢を楽しめるはずなのに、消費者にされて記号消費のゲームへと駆り立てられている。

II、むしろ贅沢を求め、物そのものを受け取って浪費することこそが大切ではないのか。それは人間に充実感や豊かさをもたらす。そして何より、浪費は満足によって止まる。物の受け取りには限界があるからです。それに対して消費には限界がない。だとすると、消費社会がもたらす贅沢を退けて「清貧」に生きるべきだという主張は、消費社会の根本的な特徴のみならず、人間にとつての豊かさの大切さをも捉え損ねている。これが『暇と退屈の倫理学』の大きな主張の一つでした。

浪費はどこかで満足に達して止まるという点は極めて重要です。なぜならば、自分たちが奪われている楽しみや豊かさを取り戻すこ

とによってこそ、大量生産・大量消費・大量投資に基づく消費社会の悪循環に亀裂を入れることができるという視点が得られるからです。ここからは、むしろ贅沢を求めることによってこそ社会は変わるという結論が導かれます。実際にそうだと思えます。物をきちんと受け取って楽しむことが^③ゼンパン化すれば、社会は変わります。

(中略)

さて、こうして贅沢について考察を深めていくとだんだん見えてくるのが、**C** 贅沢と目的の関係です。贅沢の本質には、目的なるものからの逸脱があるのではないのでしょうか。たとえば、食事をするのは栄養を取るためであり、栄養摂取が食事の目的であると考えすることはできます。確かに栄養摂取は食事についての欠かせない要素です。

しかし、食事と栄養摂取を等しいものと捉えることができるのでしょうか。栄養摂取をしていれば、人間は確かに生存できるけれども、食事を生存という目的に還元することができのでしょうか。還元してよいのでしょうか。我々が豊かさや充実感を感じるのには、目的をはみ出した部分によつてです。確かに食に目的を設定するならばその目的は栄養摂取である。けれども、食がその目的しか^④ツイキュウしないようになっていたら、食における人間らしさは失われてしまうと云うべきではないのでしょうか。その意味で、食が持つ栄養摂取という目的を超え出る経験、すなわち贅沢の経験が人間の食には欠かせないと言ふことができるでしょう。食はその目的には還元できない側面を持っている。

同じことが、衣についても言えるでしょう。衣服は確かに保温等によって身を守ったり、身を覆って隠したりすることを目的としている。しかし、衣をそうした目的に還元できるのでしょうか。還元すべきでしょうか。住についても全く同じことが言えます。つまり、

楽しんで浪費したり贅沢を享受したりすることは、生存の必要を
超え出る、あるいは目的からはみ出る経験であり、我々は豊かさを
感じて人間らしく生きるためにそうした経験を必要としているので
す。必要と目的に還元できない生こそが、人間らしい生の核心にあ
ると言うことができます。

それに対し、現代社会はあらゆるものを目的に還元し、目的から
はみ出るものを認めようとしないうちに社会になりつつあるのではないか
——これが今日の話で皆さんと^⑥キヨウユウしたいと思っ
ている問題です。消費社会の論理は二一世紀になった現在でも支配的である
けれども、他方で、すべてを目的に還元する論理がそれと共犯関係
を結んでこの社会を覆いつつあるのではないか。

(中略)

つまり資本は、現状に対して疑問を抱き、何事かに気づき始めた
人間を、これまで通りの消費社会の論理に連れ戻そうとするのです。
だとすると、すべてを目的に還元する論理、目的をはみ出るものを
許さない論理は、消費社会の論理を継続するために、現在、この社
会でその支配を広げつつあるのだと言うことができるのではないで
しょうか。

III コロナ危機下の現代社会についての僕の仮説を述べてお
きたいと思います。確かにコロナ危機下で社会は大きく変容したよ
うに見えます。しかし、*と名指されたものを排除するのを厭
わない社会の傾向——この傾向はこの四字熟語を使っていない多くの
諸外国でも同様と思われま——は、実はそもそもコロナ以前か
ら少しずつ進行していた社会の傾向ではないか。そして、より抽象
的な言葉で言い換えるならば、その社会の傾向とはつまり、目的を
はみ出るものを許さないという傾向ではないか。

そもそも、なぜ消費が浪費と混同されてしまうのでしょうか。そ

れは消費社会が必死に「消費こそが贅沢をもたらすのだ」と消費者
を説得し続けているからでしょう。だからこそ消費社会は、贅沢に
気づき始めた人間には、「必要や目的を超えて何かを求めるなんて
おかしいでしょ」とまるで倫理を論ずかのようにささやいてくる。

この二つの論理、すなわち、人々を記号消費のうちに留めおこうと
する論理と、必要や目的を超え出る浪費を行おうとする人間にその
贅沢を戒める論理とが手を結んだところに現代社会があり、コロナ
危機下、「*」と名指されたものを排除するのを厭わない傾
向がヨウイに支配的となれたのは、もともとこの二重の論理が支配
的だったからではないでしょうか。それは比喩的に言えば、食事を
栄養摂取に等しいものと捉える社会です。実際、食事を栄養摂取と
等しく捉える人を前にしても、僕らはあまり驚かなくなっています。

だとすると、D コロナ危機下で起こっていることを「コロナだか
ら仕方がない」という一言で片付けるわけにはいかなくなりませ
もちろん、一時的に様々な活動が制限されねばならなかったことは
間違いない。けれども、だとしても、コロナ危機下に起こっている
ことを先の一言で片付けてはいけません。それは、コロナ危機だから
進められたことではない可能性があるのです。批判的に検討される
べきだった傾向が、コロナを理由にして推進されているだけかもし
れないのです。

(國分功一郎 『X』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

ボードリヤール：主に二〇世紀に活躍した、フランスの社会学
者、哲学者。『物の体系——記号の消費』の原
著者。

『暇と退屈の倫理学』：本文の筆者である國分功一郎の原著。

二〇一一年初刊。

問1 線①～④のカタカナを漢字に直しなさい。

解答番号は裏面の 101 105

① 「ゴウセイ」 101

② 「ヨウイ」 102

③ 「ゼンパン」 103

④ 「ツイキュウ」 104

⑤ 「キョウユウ」 105

問2 線Ⅰ～Ⅲに入る語の組み合わせとして最も適当

なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 1

- | | | | |
|---|----------|------------|------------|
| ① | I ..そして | II ..しかし | III ..また |
| ② | I ..一方で | II ..つまり | III ..例えば |
| ③ | I ..さらに | II ..よって | III ..ところで |
| ④ | I ..ところが | II ..だとすれば | III ..ここで |

問3 線A「人類はずっと浪費を楽しんできた」とありま

すが、その内容の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 2

① 人間は、未開社会の時代から、限界を超えた支出を享受することによって、もたらされることのない満足を求めてきたということ。

② 人間は、あらゆる時代において、生存にとつての必要を超えた支出を享受することによって、十二分な食事をとり満足を得てきたということ。

③ 人間は、遙か昔の古代から、限界を超えて物を受け取ることによって、なくても生きてはいけるようなものまで手に入れ満足を得てきたということ。

④ 人間は、あらゆる社会において、大量の観念や記号を受け取ることによって、豊かさを感じるといった意味での満足を求めてきたということ。

問4 ———線B「消費のメカニズムを応用すれば、経済は人間を終わらなき消費のサイクルへと向かわせることができます」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 3

- ① 消費とは観念を対象とした行為であり、消費によってこそ贅沢を享受できるので、人々は終わることなく流行を追いかけるから。
- ② 消費とは記号を対象とした行為であり、消費によつてはいつまでも満足を得られず、人々は次から次へと新たな対象を求め続けるから。
- ③ 消費とは情報を対象とした行為であり、消費によつては充満がもたらされることはなく、人々は満足を得られる物そのものを探し続けるから。
- ④ 消費とは物そのものを対象とした行為であり、消費によつてこそ豊かさを感じられるので、人々は大量生産・大量消費を楽しみ続けるから。

問5 ———線C「贅沢と目的の関係」とありますが、「贅沢」と「目的」についての説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 4

- ① 人間は、目的からはみ出た部分においてこそ贅沢を感じることができる。
- ② 例えば衣服では、身を覆い隠す機能が目的にあたり、体温管理の機能が贅沢にあたる。
- ③ 人間らしい生の核心は、生存するための必要に応じた目的の内にはむしろない。
- ④ すべてを目的に還元する論理は、消費社会の論理による支配を強化してしまう。

問6 * に入る共通の語として最も適当なものを、次の①

～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 5

- ① 不要不急
- ② 不可抗力
- ③ 必要火急
- ④ 急転直下

問7 — 線D「コロナ危機下で起こっていることを『コロナ

だから仕方がない』という一言で片付けるわけにはいかなくなります」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 6

- ① コロナ危機下における社会の大きな変容は、人々を記号消費のうちに留める論理と贅沢を戒める論理により生じた事態である可能性があるから。
- ② コロナ危機下における目的をはみ出るものを許さないような風潮は、実はコロナ危機以前から存在していた傾向が推進されただけである可能性があるから。
- ③ コロナ危機下において消費と浪費が混同されてしまったことは、消費社会の論理を継続させる結果を招いてしまう可能性があるから。
- ④ コロナ危機下において一時的に様々な活動が制限されたしまったことは、もともと支配的だった必要と目的の二重の論理により進められたものである可能性があるから。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～④のうちから一つ
選びなさい。

解答番号は

7

- ① 消費社会は人間に贅沢を提供しないとする前著での指摘を
もとに、コロナ危機の反動として限界を超えて物を受け取り
贅沢を感じようとし過ぎる傾向が推進されつつある現代社会
を批評している。
- ② 消費社会がもたらす贅沢を退けるべきだとする前著での指
摘をもとに、コロナ危機をきっかけとして消費社会の論理と
すべてを目的に還元する論理の共犯関係がますます強化され
てゆきつつある現代社会を批評している。
- ③ 消費社会を変えるためにはむしろ贅沢を求めるべきだとす
る前著での指摘をもとに、コロナ危機もあいまって目的から
はみ出るものを認めようとしないう姿勢が加速しつつある現代
社会を批評している。
- ④ 消費には限界がないが浪費には限界があるとする前著での
指摘をもとに、コロナ危機下においては満足をもたらすほど
の浪費をすることは難しいと諦めて消費により満足する手段
を求めるようになりつつある現代社会を批評している。

問9 この本文が載った書籍の題名『X』には、筆者の主
張を端的に表したものが入ります。その題名として最も適当だ
と考えられるものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

8

- ① 目的への抵抗
- ② 目的の消滅
- ③ 目的への還元
- ④ 目的の達成

第2問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」は、気象学を専門とする「藤巻先生」の研究室で学ぶ大学生である。先生には「和也」という中学生の息子がいて、彼の家庭教師をすることになった。ある日、和也の勉強を教えた後に、藤巻家の家族とともに食事をするようになった。

八月二十四日の夕方、僕は藤巻邸を訪ねた。

辞書で「処暑」をひいてみたところ、やはり暑さがやむ時期という意味らしい。この日は毎年、庭で花火をするのだと和也が教えてくれた。夏らしいことをして、夏の終わりをしめくろうという趣向だろうか。てっきり東京のならわしなのかと思ったら、藤巻家独自の恒例行事だという。

まずはいつものように和也の勉強を見てやった後、ふたりで部屋を出た。磨き抜かれた廊下を玄関とは逆の方向に進み、左手の襖を開けると、中は十畳ほどの和室だった。床の間に掛け軸が飾られ、黄色い花が生けてある。中央の細長い座卓に、奥さんが箸や食器を並べていた。

藤巻先生もいた。奥の縁側に、こちらには背を向けて座っている。「お父さん」と和也が呼んでも応えない。庭を眺めているふうにも見えるけれど、視線の先にあるのはおそらく植木や花壇ではなく、その上に広がる空だろう。研究熱心なのは自宅でも変わらないようだ。

(中略)

「ねえ、お父さんたちは天気の研究をしてるんでしょ」

和也が箸を置き、父親と僕を見比べた。

「被害が出ないように防げないわけ？」

「それは難しい」

藤巻先生は即座に答えた。

「気象は人間の力ではコントロールできない。雨や風を弱めることはできないし、雷も竜巻もとめられない」

「じゃあ、なんのために研究してるの？」

和也が①いぶかしげに眉根を寄せた。

「知りたいからだよ。気象のしくみを」

「知っても、どうにもできないの？」

「どうにもできなくても、知りたい」

「もちろん、まったく役に立たないわけじゃないですしね」

僕は見かねて口を挟んだ。

「天気を正確に予測できれば、前もって手を打てるから。家の窓や屋根を補強するように呼びかけたり、住民を避難させたり」

「だけど、家は流されちゃうんだよね？」

「まあでも、命が助かるのが一番じゃないの」

奥さんもとりなしてくれたが、A和也はまだ積然としない様子で首をすくめている。

「やっぱり、おれにはよくわかんないや」

「わからないことだらけだよ、この世界は」

先生がひとりごとのように言った。

「だからこそ、おもしろい」

一時はどうなることかとほらはらしたけれど、それ以降は和也が父親につっかかることもなく、食事は和やかに進んだ。鰻をたいらげた後、デザートには西瓜が出た。

話していたのは主に、奥さんと和也だった。僕の学生生活につい

ていくつか質問を受け、和也が幼かった時分の思い出話も聞いた。中でも印象的だったのは、絵の話である。

朝起きたらまず空を観察するというのが、藤巻先生の長年の日課だという。晴れていれば庭に出て、雨の日には窓越しに、とつくりと眺める。そんな父親の姿に、幼い和也はおおいに好奇心をくすぐられたらしい。よちよち歩きで追いかけていつては、並んで空を見上げていたそう。熱視線の先に、なにかとつもなくおもしろいものが浮かんでいはいはずだと思っただろう。

「お父さんのまねをして、こう腰に手をあてて、あごをそらしてね。今にも後ろにひっくり返りそうで、見ているわたしはひやひやしちやって」

奥さんは身ぶりをまじえて説明した。本人は覚えていないようで、首をかしげている。

「それで、後で空の絵を描くんですよ。お父さんに見せるんだ、って言うて。親ばかかもしれないですけど、けっこうな力作で……そう、先生にも見ていただいたら？」

「親ばかだつて。子どもの落書きだもん」

照れくさげに首を振った和也の横から、藤巻先生も口添えした。

「いや、わたしもひさしぶりに見たいね。あれはなかなかたいしたものだよ」

「へえ、お父さんがほめてくれるなんて、珍しいこともあるもんだね」

冗談めかしてまぜ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった。

「あれ、どこにしまったっけ？」

「あなたの部屋じゃない？ 納戸か、書斎の押し入れかもね」

奥さんも後ろからついていき、僕は先生とふたりで和室に残された。

「先週貸していただいた本、もうじき読み終わりそうです。週明け

にでもお返しします」

なにげなく切り出したところ、B先生は目を輝かせた。

「あの超音波風速温度計は、実に画期的な発明だね」

超音波風速温度計のもたらした貢献について、活用事例について、今後検討すべき改良点について、堰を切ったように語り出す。

お絵描き帳が見あたらなかったのか、和也たちはなかなか帰ってこなかった。その間に、先生の話は加速度をつけて盛りあがった。

ようやく戻ってきたふたりが和室の入口で顔を見あわせているのを、僕は視界の端にとらえた。自分から水を向けた手前、話の腰を折るのもためらわれ、どうしたものかと弱っていると、スケッチブックを小脇に抱えたC和也がこちらへずんずん近づいてきた。

「お父さん」

Dうん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。

「例の、南西諸島の海上観測でも役に立ったらしい。船体の揺れによる影響をどこまで補正できるかが課題だな」

「ねえ、あなた」

奥さんも困惑顔で呼びかけた。

と、先生がはっとしたように口をつぐんだ。僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。

「ああ、※スミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい」

先生は言った。和也が※踵を返し、無言で部屋を出ていった。

おろおろしている奥さんにかわって、自室にひっこんでしまった和也を呼びにいく役目を僕が引き受けたのは、E少なからず責任を感じたからだ。

父親に絵をほめられたときに和也が浮かべた表情を、僕は見逃していなかった。雲間から一条の光が差すような、笑顔だった。いつだって陽気で快活で、いっそ軽薄な感じさえする子だけれど、あんな笑みははじめて見た。

「花火をしよう」

「花火をしよう」

ドアを開けた和也に、僕は言った。

「おれはいい。先生がつきあってあげれば？ そのほうが親父も喜ぶんじゃない？」

和也はけだるげに首を振った。険しい目つきも、ふてくされたような皮肉っぽい口ぶりも、ふだんの和也らしくない。僕は部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。

「まあ、そうかつかするなよ」

藤巻先生に悪気はない。話に夢中になって、他のことをつかのま忘れてしまっていただけで、息子を傷つけるつもりはさらさらなかったに違いない。「様子を見てください」と僕が席を立ったときも、なにが起きたのか©腑に落ちない様子できよとんとしていた。「別にしてない」

和也は投げやりに言い捨てる。

「昔から知ってるもの。あのひとは、おれのことなんか興味がない」
F 腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。

「でも、おれも先生みたいに頭がよかったら、違ったのかな」
「え？」

「親父があんなに楽しそうにしているの、はじめて見たよ。いつも家ではたいくつなんだろね。おれたちじゃ話し相手になれないもんね」

(中略)

「どうせ、おれはばかだから。親父にはついていけないよ。さっきの話じゃないけど、なにを考えているんだか、おれにはちっともわからない」

僕は小さく息を吸って、口を開いた。

「僕にもわからないよ。きみのお父さんが、なにを考えているのか」
和也が探るように目をすがめた。僕は机に放り出されたスケッチ

ブックを手にとった。

「僕が家庭教師を頼まれたとき、なんて言われたと思う？」
和也は答えない。身じろぎもしない。

「学校の成績をそう気にすることもないんじゃないか、ってお父さんはおっしゃった。得意なことを好きにやらせるほうが、本人のためになるだろうってね」

色あせた表紙をめくってみる。ページ全体が青いクレヨンで丹念に塗りつぶされている。白いさざ波のような模様は、巻積雲けんせきうんだろう。

「よく覚えてるよ、意外だったから」

次のページも、そのまた次も、空の絵だった。一枚ごとに、空の色も雲のかたちも違う。確かに力作ぞろいだ。

「藤巻先生はとても熱心な研究者だ。もしも僕だったら、息子も自分と同じように、学問の道に進ませようとするだろうね。本人が望もうが、望むまいが」

僕は手をとめた。開いたページには、今の季節におなじみのもくもくと不穏にふくらんだ積雲が、繊細な※陰翳いんえつまでつけて描かれている。

「G わからないひとだよ、きみのお父さんは」
わからないことだらけだよ、この世界は——まさに先ほど先生自身に口にした言葉を、僕は思い返していた。
だからこそ、おもしろい。

(瀧羽麻子 『博士の長靴』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

スミ… 和也の母。藤巻先生の妻。

踵を返し… 後戻りし。引き返し。

陰翳… 光の当たらない暗い部分。かげ。

問1 〓線①〓〓線②〓〓線③〓〓線④〓の意図として最も適当なものを、あとの①

〓④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 〓9〓 〓11〓

① 「いぶかしげに」 〓9〓

② 見下すように

③ 満足そうに

④ 反発するように

① 「話の腰を折る」 〓10〓

② 話を盛り上げる

③ 話を途中で妨げる

④ 話の話題を変える

① 「腑に落ちない」 〓11〓

② 想像できない

③ 答えが出ない

④ 気が気でない

問2 〓線A〓「和也はまだ釈然としなげ様子で首をすくめ

ている」とありますが、このときの「和也」を説明したものと

して最も適当なものを、次の①〓④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 〓12〓

① あまり興味のない気象について「僕」の関心を得たい思い

で質問したにもかかわらず、理解できないような受け応えを

した父親に対して憤りを感じている。

② 気象学を研究する目的を知りたい思いで質問したにもか

かわらず、的を射た受け応えをしてくれない父親に対して納得

できないでいる。

③ 家庭教師である「僕」の学力を知りたい思いで質問したに

もかわらず、「僕」の発言を遮るようなひと言で会話を中

断させようとする父親に対して気が滅入っている。

④ 親子の関係が良好であることを「僕」に知ってもらいたい

思いで質問したにもかかわらず、投げやりな言葉で対応する

父親に対して反感を抱いている。

問3 ———線B「先生は目を輝かせた」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

13

- ① 思い出話の余韻に浸っていると本の返却話を突然さ
れたので、「僕」に対して不快な思いを抱いたから。
- ② 家族にしかわからない思い出話に興じていたので、つまら
ない思いをさせてしまったと「僕」に申し訳なく感じたから。
- ③ 貸していた本が返却されるといふ話をきっかけに、「僕」
と学問や研究の話ができるのではないかと期待したから。
- ④ 貸していた本をいつ返してくれるか不安であったが、「僕」
から近々返却してくれるというのを聞き一安心したから。

問4 ———線C「和也がこちらへずんずん近づいてきた」とあ
りますが、このような「和也」の姿から読み取れる心情として
最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

14

- ① 父が自分をほめてくれたうえに自分でも幼いながら上手に
描けたと自負する絵であったため、勉強で手こずらせている
「僕」にも見てもらいたいという心情。
- ② 父にほめられ気分をよくして絵を探しにいつている間に父
が研究の話で盛りあがっていたので、少なからず戸惑いがあ
ったものの父に見てもらおうと勇んでいる心情。
- ③ 絵を描くことに自信があり両親からも評価を受けることが
できたので、「僕」にも勉強以外に才能があることをこの機
会に気づいてもらいたいという心情。
- ④ 幼い頃に描いた絵を両親そろってほめてくれたことは嬉し
くて仕方ないが、「僕」に見られてしまうことに多少のため
らいを隠しきれないでいる心情。

問5 ———線D「うん、と先生はおさなりの生返事をしたきり、見向きもしない」とありますが、このときの「先生」を説明したものと最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 15

- ① 客人として招いた「僕」と研究に関する大切な話をしているにもかかわらず、その状況を汲み取ることができない息子に対して、礼儀を重んじるようにあえて冷ややかな態度を示すことで分かせようとしている。
- ② 本の返却話が発端となって研究についての話がどんどん盛り上がり夢中になってしまったあまり、ようやく探しあてた絵を見てもらおうとする息子の声に対して、いいかげんな受け応えで関心を示そうとしないている。
- ③ ようやく見つけることができた絵を見てもらいたいと息子が自分を求めていることには気づいていたが、絵に関することは専門外なので深入りしない方が得策だと考え、軽く返事をするこゝでごまかそうとしている。
- ④ 過去の思い出の中にある息子が描いた絵やその熱心な姿よりも現在の研究に対する思い入れの方が強く、研究熱心な「僕」との会話が盛りあがっているので、強い口調を向けて話が一段落つくまで我慢させようとしている。

問6 ———線E「少なからず責任を感じたからだ」とありますが、ここでいう「責任」を説明したものと最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 16

- ① 精神的な距離を感じている父親から久しぶりにほめられ喜ぶ「和也」の気持ちをわかっているながら、先生の熱心な研究話を止めることができず、結果的に奥さんまでも困らせることになってしまったことに対する責任。
- ② 父に絵のことを評価されたことで勉強以外の面で認めてもらいたい「和也」の意気込みをその行動からもわかっているが、本の話を持ち出したことで、結果的に彼の才能が評価される機会を奪ってしまったことに対する責任。
- ③ 幼い頃に描いた絵のことを父親にほめられ上機嫌になっている「和也」の気持ちをわかっているながら、先生が関心を向ける話をしたことで、結果的に彼の心を傷つけることになってしまったことに対する責任。
- ④ 絵の話題から父親との思い出に浸りたいと願う「和也」の気持ちを痛いほどわかっているながら、本の話をつきかけに先生が研究の話に夢中になってしまい、結果的に彼を悲しませてしまったことに対する責任。

問7 ———線F 「腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見

据えた」とありますが、このときの「和也」を説明したものと
して最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 17

- ① 息子が絵を持ってきたのを気にかけないほど夢中で研究の話をする父の姿を目の当たりにして、父の関心が自分よりも研究や学問にあると改めて思い知らされ落胆している。
- ② 家でも研究のことばかり考えている父が自分に関心を持ってくれたのに、研究に関する話題で父の意識を自分から遠ざけてしまった「僕」に対して強い反感を抱いている。
- ③ 父も力作と評価してくれた絵を必死に探し出し見てもらおうとしたのに、うまくあしらい自分勝手な振る舞いばかりする父親に対して軽蔑する気持ちをより強めている。
- ④ 「僕」のように勉強ができる息子なら父の関心も自分に向くだろうとわかってはいるが、勉強を教えてもらっても成績が伸び悩んでいる自分自身を情けなく感じている。

問8 ———線G 「わからないひとだよ、きみのお父さんは」と

ありますが、この言葉に託された「僕」の想いとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 18

- ① 先生は研究者であるため家族を犠牲にしなくてはならないこともあるのだとまだ中学生の和也に理解してもらいたいと思うと同時に、わからないことであっても懸命に勉強することによっていずれば解決できるようになるということをわかってほしいと願う想いが託されている。
- ② 先生は一見して仕事中心の人間に映るかもしれないが決して息子を傷つけようとしているわけではないことを和也に伝えたいと思うと同時に、わからないことであってもそれを知ろうとすることが大切なのだということに気づいてほしいと願う想いが託されている。
- ③ わからないことばかりだから世界はおもしろいという先生が言った言葉の真意を和也にも理解してもらいたいと思うと同時に、和也自身がこれから歩む将来にどんな困難があったとしても父の言葉を支えにして力強く立ち向かってほしいと願う想いが託されている。
- ④ 研究熱心な先生ではあるが「僕」自身もつかみどころがない人だと和也に同調していることを伝えたいと思うと同時に、一方では先生から気象学を学ぶ学生としては尊敬に値する素晴らしい人物なので和也にも敬意を持って父親と関わってほしいと願う想いが託されている。

問9 登場人物の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

19

- ① 父親の存在を疎ましく感じ始めていたが、幼い頃の絵をほめられたことで父親に対するわだかまりがすべて解消して嬉しく思ったり、逆に期待する気持ちを裏切られ落胆したり、「和也」はいつも父親の言動に振り回されている。
- ② 息子には得意なことを伸ばしてほしいと願いながらも、唯一の思い出である息子の絵に関心を向けなかったり、妻には自分勝手な指図をしたり、「先生」はいつも研究に関することを最優先して家族のことを顧みようとしない。
- ③ 藤巻先生のことを家族を支える夫としては申し分ないと思うが、息子の将来を真剣に考えようとしないうちは憤慨したり、息子の感情を逆なでないよう行動を共にしたり、「スミ」は夫と息子との間で続く不穏な関係に嫌気がさしている。
- ④ 家庭教師を頼まれたときの和也に対する先生の思いがわかっているからこそ、投げやりな態度をなだめたり、わからないからこそ価値があることを伝えようとしたり、「僕」は先生と和也との間に立って温かなまなざしを注いでいる。

問題は次のページに続きます。

第3問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ねずみの、娘を※まうけて、「①天下に並びなき婿をとらん」と、

※おほけなく思ひ企てて、「※日天子こそ世を照らしたまふ。徳め

でたけれ」と思ひて、朝日の出でたまふに、「娘をもちて候ふ。

※みめかたちなだらかに候ふ。②まゐらせん」と申すに、「われは

世間を照らす徳あれども、雲に会ひぬれば光もなくなるなり。雲を

婿にとれ」とおほせられければ、「まことに」と思ひて、黒き雲の

見ゆるに会ひて、このよし申すに、「われは日の光をも隠す徳あれ

ども、風に吹き立てられぬれば、A何にてもなし。風を婿にせよ」

と言ふ。「※さも」と思ひて、※山風の吹けるに向かひて、このよ

し申すに、「われは雲をも吹き、木草をも吹きなびかす徳あれども、

※築地に会ひぬれば力なきなり。築地を婿にせよ」と言ふ。「げに」

と思ひて、築地にBこのよしを言ふに、「われは風にて動かぬ徳あ

れども、ねずみに掘らるるとき、耐へがたきなり」と言ひければ、

さては、*は何にもすぐれたるとて、*を婿にとりけり。

(『沙石集』)

※(文中のことばの意味)

まうけて…得て。

おほけなく…あつかましく。

日天子…太陽。

徳…能力。

みめかたちなだらかに候ふ…顔かたちは整っております。

さも…本来にその通りだ。

山風…山から吹く風。

築地…土を固めて作った土塀。

問1 線①「天下に並びなき」・②「まゐらせん」の意味

として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は ① 20 ・ ② 21

① 「天下に並びなき」 20

① 世間で有名な

② 他にくらべるものがないほどすばらしい

③ とても頼りなくて不安な

④ 並び立つものがないほど背が高い

② 「まゐらせん」 21

① お参りしよう

② 召し上がるう

③ うかがおう

④ さし上げよう

問2 ———線A「何にてもなし」と同じような意味を表すものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 徳めでたけれ
- ② 光もなくなるなり
- ③ 力なきなり
- ④ 耐へがたきなり

問3 ———線B「このよし」の内容を具体的に説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

- ① ねずみより優れている太陽を娘の婿にしたいということ。
- ② 太陽より優れている雲を娘の婿にしたいということ。
- ③ 雲より優れている風を娘の婿にしたいということ。
- ④ 風より優れている築地を娘の婿にしたいということ。

問4 * に入る共通の語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 雲
- ② 風
- ③ 築地
- ④ ねずみ

これで問題は終わりです。